

オンライン授業における「乳児保育」のふりかえり

—ティーチング・ポートフォリオ・チャートの活用—

Reflections on “Infant care” in online classes

—Utilization of teaching portfolio chart—

旭 彩 希*

1. はじめに

少子化や核家族化が進行し、地域とのつながりも希薄になっているなか、自分と異なる世代と接する機会が少なくなっている。保育士をめざす学生が小さい子ども、とくに乳児（本稿では0, 1, 2歳児を意味する）をお世話する機会はほとんどないだろう。これまで乳児をお世話する機会や触れ合う機会がほとんどなかった学生たちにとって、乳児の生活や育ちを理解することや乳児を預ける保護者の思いを理解して支援を考えるということはなかなか容易なことではない。

一方で乳児保育のニーズは高く、保育所等の利用児童数、待機児童数に占める低年齢児（0～2歳）の割合（表1）と特定地域型保育事業数の増加の推移（図1）を見ても分かるように、3歳未満児の保育を担う保育所等と保育士がとくに必要とされている。こうした保育を取り巻く社会情勢の変化の中で幼児期の学校教育や保育、地域の子育て支援の量の拡充や質の向上を進めていくために、2015（平成27）年に「子ども・子育て支援新制度」が施行された¹⁾。この影響を受けて、2017（平成29）年に「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」及び「幼稚園教育要領」の改訂が行われ、乳児保育に関する記載が充実したことで0, 1, 2歳児の保育について改めてその重要性が示された。

このような保育を取り巻く社会情勢の変化、保育所保育指針の改定等を踏まえて、「より実践力のある保育士の養成に向けて」という背景のもと保育士養成課程の改訂が行われ、2019（平成31）年に適用された²⁾。旧課程の「乳児保育」（演習2単位）は「乳児保育Ⅰ（講義2単位）」（新設）と「乳児保育Ⅱ（演習1単位）」に再編され、授業内容の充実が図られた。

乳児期は、特定の大人との愛情豊かな応答的なかわりを通して愛着関係を築き、生活や遊びを通して精神的・身体的・社会的な発達の基盤、人格形成の基礎を培う非常に重要な時期である。乳児保育の授業を担当する者として筆者は、保育士をめざす学生に乳児保育は子どもと保護者の人生にかかわる覚悟をもって臨んでほしいと願っている。そのためには、乳児をお世話する機会や触れ合う機会がほとんどなかった学生たちが、乳児保育への興味をもち、乳児保育に携わる責任とやりがい、喜びを感じられるような授業を展開し、より実践力のある保育士の養成につなげていかなければならないと考えている。

2019（平成31）年度入学生から適用された新課程の「乳児保育Ⅰ及びⅡ」は、本学のこどもコミュニケーション学科では3年次履修科目として位置づけられているため、2021（令和3）年度に初めて開講することとなった。

よって、本稿では、今年度が初めてとなった「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業実践を省察し、今後の授業改善への気づきを得たいと考える。

* 江戸川大学こどもコミュニケーション学科 講師

表1. 保育所等の年齢区分別の利用児童数・待機児童数

	利用児童数	待機児童数
低年齢児(0~2歳)	1,105,335人 (40.3%)	4,935人 (87.6%)
うち0歳児	146,361人 (5.3%)	476人 (8.5%)
うち1・2歳児	958,974人 (35.0%)	4,459人 (79.1%)
3歳以上児	1,636,736人 (59.7%)	699人 (12.4%)
全年齢児計	2,742,071人 (100.0%)	5,634人 (100.0%)

(注)利用児童数は、全体(幼稚園型認定こども園等、地域型保育事業等を含む)。

(出典：厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ(令和3年4月1日時点)」)

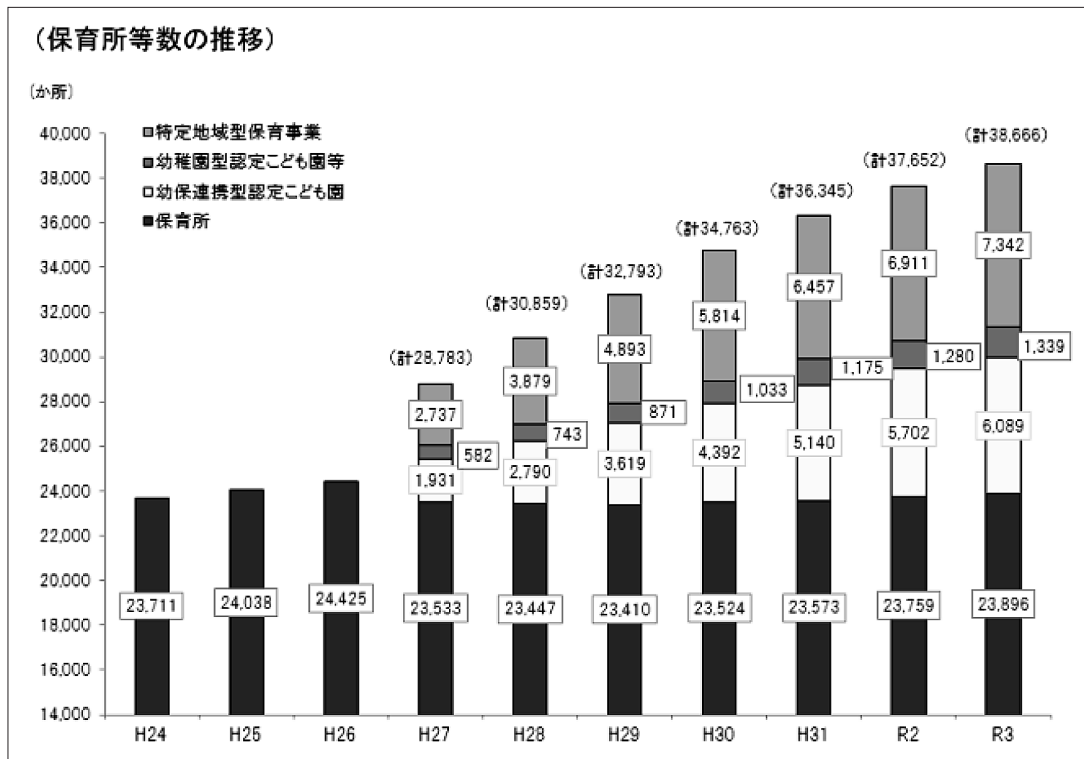


図1. 保育所等数の推移

(出典：厚生労働省「保育所等関連状況取りまとめ(令和3年4月1日時点)」)

2. 目的

本稿の目的は、今年度の「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業実践を振り返り、今後の課題と改善方法について検討することである。ポストコロナ時代には対面授業とオンライン授業双方の良さを組み合わせた教育が標準化していきだろうと予想される。今年度実施した「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業は、対面型、オンライン型、ハイフレック

クス型を織り交ぜながら行った。この授業実践を省察することは、新しい時代にも学生にとってより良い授業、質の高い授業を展開するために意義があるものと考えられる。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、授業内で研究の主旨として調査した結果は教授内容の改善と授

業研究のために活用すること、記載内容が本学の研究紀要に掲載する可能性があるが、特定の個人が識別できる情報として公表することはないこと、成績には関係しないことを口頭および文面で説明したうえで同意を得た。

4. 方法

授業実践の振り返りには、ティーチング・ポートフォリオ・チャート（以下TPチャートと記す）を用いる。TPチャートの作成を通して課題点を見出し、今後の授業方法や内容等の改善方法を検討し、考察を行う。TPチャートとは、ティーチング・ポートフォリオ（文章作成を通じた教育活動の省察プロセスとそれにより作成した文書のすべて）をもとに開発されたツールで、栗田佳代子・吉田壘（東京大学）によって考案されたものである。ティーチング・ポートフォリオについては、2008（平成20）年に文部科学省中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において取り上げられている。FDの実質化のために教育業績の適切な評

価が不可欠であるとして、ティーチング・ポートフォリオ（大学教員による教育業績記録ファイル）などの活用について³⁾記されている。

ティーチング・ポートフォリオ作成には膨大な時間が必要となるが、ティーチング・ポートフォリオ作成の事前準備としても用いられるTPチャートは比較的短時間（2～3時間程度）で作成できる良さとA3用紙1枚にして、自らの教育活動全体を俯瞰して見ることができる良さがある。TPチャートの作成によって、教育活動の俯瞰と振り返りを行い、自身の教育のあり方を改善していく方法である。TPチャートは、A3用紙1枚のワークシートを使用して「責任」「改善・努力」「成果・評価」「方法」「方針」「理念」「目標」の項目に、自らが行ってきた教育について省察しながら付箋を貼って作成する⁴⁾。今回の省察の根拠となるエビデンスには、「シラバス、授業案、試験、レポート課題、配布資料、スライド資料、動画、写真、授業評価アンケート結果」を用いる。TP作成過程は、他人と共有し協同作業をした方がより深い省察につながるが、一応ひとりでも行えるということで、結

表2. TPチャート作成の流れと所要時間⁵⁾

所要時間(分)	内容	形態
1	「基本情報」の記入	個人作業
2	【作業目的】の記入	
5	「教育の責任（教育活動）」の作成	
2	【改善・努力】の作成	
3	【成果・評価】の作成	
8	自己紹介とチャートの共有	ペアワーク（各4分）
7	【方法】の作成	個人作業
7	【方針】の作成	
7	【理念】の作成	
2	「理念に関する個人エピソード」の作成	
5	【理念】【方針・方法】の対応づけ	ペアワーク（各4分）
8	対応づけの共有と対話	
2	共有の気づきをもとに修正	個人作業
3	「エビデンス」の作成	ペアワーク
6	「エビデンス」の共有と探索	
4	【目標】の作成	個人作業
2	「作成の感想」の記入	
8	【目標】【感想】の共有	

果に示したTPチャートは筆者のみで作成した。作成の流れは〈表2〉のとおりで、ペアワークの作業部分を省略して行った。

5. 結果および考察

(1) こどもコミュニケーション学科のカリキュラムと「乳児保育」の授業の位置づけ

本学メディアコミュニケーション学部こどもコミュニケーション学科では、全学生が卒業時に保育士資格と幼稚園教諭一種免許状の両方を取得することを前提としてカリキュラムを構成している。現在、本学科の3年生は52名（男性14名，女性38名）が在籍しており（2022年1月時点）、「乳児保育Ⅰ」は50名、「乳児保育Ⅱ」は49名が履修した。2019年度入学生から適用されたカリキュラムでは、専門科目のなかの実

践支援科目群の一つに「乳児保育Ⅰ及びⅡ」は位置づけられており、この科目群のなかから8単位以上の修得が義務付けられている。「乳児保育Ⅰ」は3年次前期・講義2単位、「乳児保育Ⅱ」は3年次後期・演習2単位で開講されている（なお、2022年度からは「乳児保育Ⅱ」演習1単位に変更）。3年次には6月に保育実習Ⅰ（保育所）、8、9月に保育実習Ⅰ（施設）、2月に保育実習ⅡまたはⅢを予定している。ただし2020年からは新型コロナウイルス感染症の影響により、実習時期の変更が余儀なくされている。保育実習履修要件としては、〈表3〉のとおりである。

乳児保育の内容を含む「保育の心理学」「こどもの保健」「保育内容総論」は既に修得済みであることを前提に「乳児保育」を履修することになる。そして学科限定科目である「学校インターンシップ実習Ⅰ及びⅡ」では、3年次の保

表3. 2019年度入学生用カリキュラム 保育実習要件科目一覧

群 ¹⁾	系列	科目名	年次	単位数	備考
2群	こども理解基礎科目群	保育原理	1	必修2	
		子ども家庭福祉	2	必修2	
		社会福祉	1	必修2	
		社会的養護Ⅰ	1	選択2	
		保育者論	1	必修2	
		保育の心理学	1	必修2	
		こどもの保健	2	選択4	
	実践支援科目群	教育・保育課程論	2	必修2	
		保育内容総論	2	必修2	
		健康*	2	必修2	*6科目中4科目以上を修得
		人間関係*	2	必修2	
		環境*	2	必修2	
		言葉*	2	必修2	
		表現（音楽）*	2	必修2	
		表現（制作）*	2	必修2	
	実技科目群	身体表現の技術※	2	選択2	※5科目中3科目以上を修得
		声楽表現の技術A※	1	必修2	
		器楽表現の技術A※	1	必修2	
		造形表現の技術A※	1	必修2	
言語表現の技術※		2	選択2		
3群		学校インターンシップ実習Ⅰ	1	選択2	
		学校インターンシップ実習Ⅱ	2	選択2	

表4. 「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業テーマと【実施形態】

授業回	乳児保育Ⅰ (フルオンライン型)	乳児保育Ⅱ (ブレンド型)
目標	・乳児保育の意義、目的と歴史の変遷及び役割などについて関連づけることができる。	・乳児保育の基本的考え方を理解し、述べるができる。
	・乳児の発達を踏まえた保育内容と保育者の役割について理解している。	・乳児の生活や遊びと保育方法及び環境について具体的に理解している。
	・乳児保育の連携の在り方や仕事内容について理解している。	・乳児保育における配慮や援助の仕方について説明することができる。
	・多様な保育の場における乳児保育の現状と課題についてグループで討議することができる	・実際の保育場を想定し計画が作成できる。
1	ガイダンス、乳児保育とは何か—社会的背景から考える	乳児保育の基本（個々の子どもに応じた援助や受容的・応答的な関わりについて）の再確認【オンライン】
2	乳児保育の成り立ちを知ろう—歴史と現状を理解する	子どもの1日の生活の流れ（デイリープログラム）の理解と保育の環境【オンライン】
3	「子ども・子育て支援新制度」—乳児保育に関わる制度を理解する	デイリープログラムの作成、長時間保育・延長保育への配慮について【オンライン】
4	乳児保育に関わる法律—児童福祉法など	集団生活への配慮と移行に向けて—保育内容と保育環境を考える【オンライン】
5	乳児保育における複数担任制—保育者同士の連携のあり方	乳児の健康と安全管理について、乳児期の玩具・児童文化財（手作りおもちゃの製作課題説明）【オンライン】
6	保育所で過ごす1日の流れ—年齢別デイリープログラム（日課表）	乳児との触れ合いの基本 抱っこ・おむつ替え・乳児の衣服の基礎知識と着脱を学ぶ【対面】 手作りおもちゃの製作【課題】
7	保育実習直前 0歳児の1日の流れ（DVD視聴）と乳幼児に対する言葉かけ	乳児との触れ合いの基本 抱っこ・おむつ替え・乳児の衣服の基礎知識と着脱を学ぶ【対面】 手作りおもちゃの製作【課題】
8	保育所保育指針—改訂の変遷とポイント	おむつの吸水性・授乳（調乳）・食事場面の発達について検証する【対面】 手作りおもちゃの製作【課題】
9	保育所保育指針—乳児保育、1歳以上3歳未満児の保育内容について	おむつの吸水性・授乳（調乳）・食事場面の発達について検証する【対面】 手作りおもちゃの製作【課題】
10	人生の基礎としての乳児期—ポルトマンの考え方に学ぶ	0, 1, 2歳児の生活と遊び—チャイルドビジョンを使って乳幼児とのかかわり、保育環境を考える【対面】 長期的な指導計画と短期的な指導計画、個別的な指導計画と集団の指導計画【オンデマンド】
11	乳児のこころの発達—身近な人との絆を育む過程	0, 1, 2歳児の生活と遊び—チャイルドビジョンを使って乳幼児とのかかわり、保育環境を考える【対面】 長期的な指導計画と短期的な指導計画、個別的な指導計画と集団の指導計画【オンデマンド】
12	乳児のことばの発達—思いを伝え合う手段を得る過程	保護者対応の問題点と対処法について 手作りおもちゃの製作課題発表①【ハイフレックス】
13	乳児のからだ—からだの発育と運動機能の発達	保護者との情報共有の在り方（便り・連絡帳など）について 手作りおもちゃの製作課題発表②【ハイフレックス】
14	保護者や関連機関との連携—ことば、虐待、発達	まとめ—乳児保育の全体をふりかえる おむつの吸水性・授乳（調乳）・食事場面の発達について グループ討議【オンライン】
	試験	最終レポート【オンライン】

育実習や4年次の教育実習を視野に入れ、実習に向けて実践力を育むことを目的とし、1年次に保育所・幼稚園・社会福祉施設の見学、2年次に1日～3日程度の体験実習を行っている。しかしながら、今年度（2021年度）の3年生はこれも新型コロナウイルス感染症の影響により保育所体験できず、乳幼児と触れ合う機会がもてないまま保育実習を行うこととなった。

(2) 「乳児保育」の授業概要

本学の授業は14週で45時間の学習を必要とする内容を1単位とし、1時限100分の授業を標準としている。今年度、本学の活動方針は緊急事態宣言下では授業は原則、全面オンラインで実施し、それ以外の場合は①「対面授業」②「オンライン授業」の2つの方法を科目ごとに決定し、対面授業については週ごとに履修者を半数に分けて出席可能とし（出席できない週はオンライン受講）、また都合により対面授業に出席できない場合もすべてオンラインでの受講を可能とした。そこで、筆者は講義科目である「乳児保育Ⅰ」は、50名の履修者全員を1時限で授業するため感染防止の観点から2021年4月15日～7月29日までの全14回の授業と試験はオンライン型とした。演習科目である「乳児保育Ⅱ」は49名の履修者が2クラスに分かれているため、2021年9月30日～1月13日までの全14回の授業は、感染状況をみながら授業の目的にあわせて対面とオンラインを組み合わせるブレンド型とした。全授業テーマと実施形態をまとめたものが〈表4〉である。

(3) 乳児保育のTPチャート

前述したTPチャートをデジタル版⁶⁾でダウンロードし作成したものが〈図2〉である。

チャート内にある黄色小付箋はエビデンスになるもの、目標欄は5～10年程度を想定した長期目標で、それ以外の項目欄にある水色付箋は1～2年程度を想定した短期目標、りんごの付箋は影響を与えている個人的なエピソードというように分けて貼付している。

TPチャートの作成を通して自らの実践から方針、理念を具体化し、さらに見直すことで方

法と方針、方針と理念が対応しているのか確認することができた。まず一番大事なことは、これまで言語化してこなかった理念を明確にしたことである。本稿のはじめに記したように“乳児保育への興味をもち、乳児保育に携わる責任とやりがい、喜びを感じられるような授業を展開し、より実践力のある保育士の養成につなげる”ことが大事だという思いをもって授業に取り組んできたが、①社会人（保育者）としての基本を身に付け、②多様な、多角的なものを見方や考え方ができる、③子どもに寄り添える保育者、④自ら学ぼうとする（学び続ける）保育者を育てたい、そのことが「学生には、保育者としての責任と誇りをもてるように成長してほしい」という理念として具体的にすることができた。自身の教育理念が本学科のカリキュラム・ポリシーや本学のディプロマ・ポリシーに対して、どのように位置づけられるのかを考えることは、今後の課題としたい。

次に、理念の実現に向けて検討した短期・長期目標について述べることにする。今年度の授業実践を振り返ってみると、実験、調査、発表、ディスカッション、小テスト、グループワークなどさまざまな方法を授業内容に応じて行ってきた。そこには、①社会人として時間管理、約束を守ることを自ら示す、②多様な考え方があることを知り、認め合う、③互いに気づきを得て学び合ってほしい、④心と体を動かして乳児のことを理解してほしい、⑤乳児のケアに関するスキルと身に付ける、⑥実践を通して、子どもの視点に立ち考えてほしい、⑦自分の考えを他者に分かりやすく伝える力を身に付けてほしい、⑧学生一人ひとりが主体になる、⑨見通しをもって自ら予習復習して学んでほしい、⑩要点、大事なところは自分で捉え、記録してほしいという方針につながっているのだと整理できたが、そのうち、⑥⑧⑨⑩については成果が不十分だったとも感じられた。例えば、後期の第11・12回目で行った対面型授業では、チャイルドビジョンを作成し、子どもの視界の疑似体験から遊びや生活環境、関わり方について考えることを目的としていたが、「面白かった」「怖かった」「見えづらく疲れた」などの疑似体験した

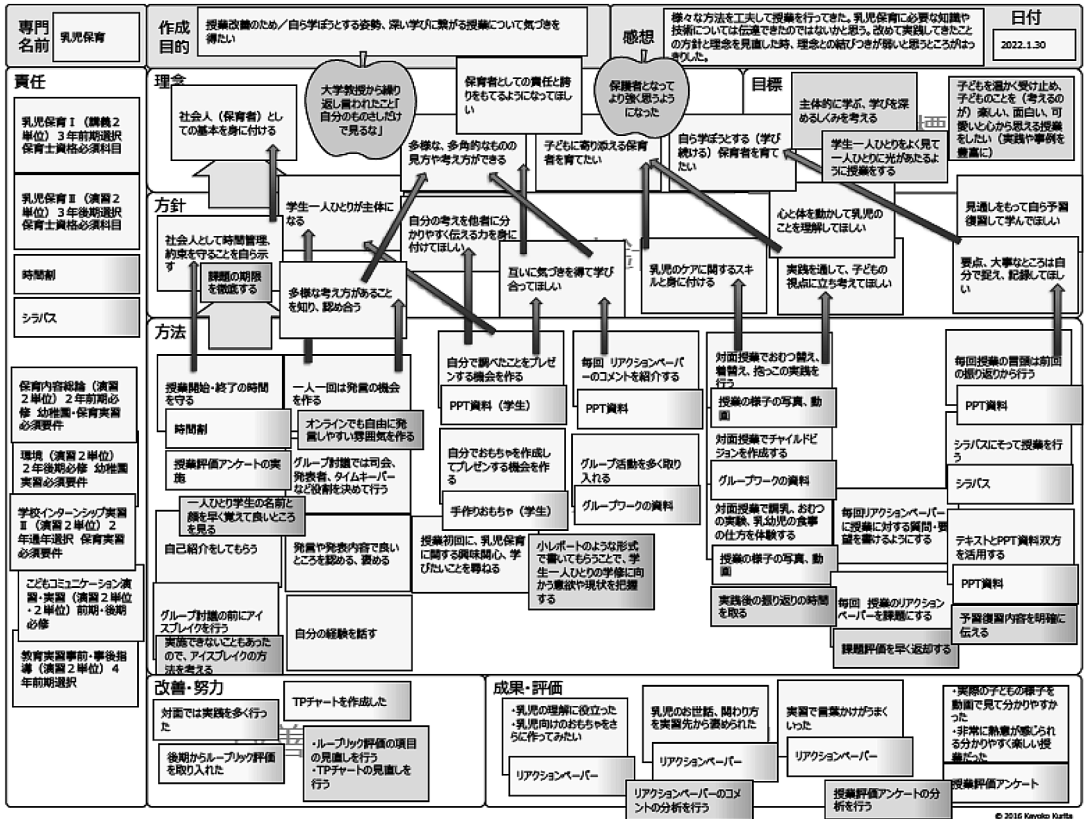


図2. 「乳児保育」の授業改善のために作成したTPチャート

個人的な感想に留まってしまい、そこから子どもの視点に立ち、どのような環境構成を考えたらよいか、日頃の関わりではどのようなことに気を配ると良いかなどを考え、保育者の援助について学びを深めることができなかった学生がいた。また、授業の理解や定着には予習や復習が大切であるが、そのために設定していた課題も一定数の学生で提出されない状況が続いていた。授業を行う側としては、今年度着任し初めて担当する「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業で、学生のことを全く知らない状態からスタートした。新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら授業形態を変更していき、結果的に前期・後期授業のうち6回分しか対面型で行うことができなかった。一人ひとりのことを良く知りたいたいと思いつつも、オンライン型授業で学生の表情が全く分からず、理解に困っていても発言できずにいるのかと思いつつもリアルタイムに状況を把握することができずフォローも十分にでき

ていなかったのだと反省する。そこには学びを深める仕組み、学びに向かう意欲、主体性を発揮させる指導や評価の工夫ができていなかったのだと考えられた。そこで、学びへの動機付けや目標、モチベーションの持続などを課題として学生が主体性を発揮して学びを深めていくために改善できることは何かを検討したものが、〈表5〉に示した短期目標・長期目標である。次年度はこれら短期目標の達成に向けて改善点に取り組みたい。

今回はTPチャートの作成を一人で行ったが、意識せずに行っていた方法を思い出し、それは何のために行っているのか、何が大切だと思っているのかと実践を省察することができた。しかし、方法、方針や理念の整合性がとれているのか見直しがまだ必要あると思われ、省察を深めるためには他者と対話する時間を設けることを今後の課題としたい。

表5. 短期目標・長期目標の設定内容について

目標	種類	内容
短期目標	改善・努力	①ルーブリック評価の項目の見直し ②TPチャートの見直し
	成果・評価	①リアクションペーパーのコメントの分析 ②授業評価アンケートの分析
	方法	①一人ひとり学生の名前と顔を早く覚えて良いところを見る ②オンラインでも自由に発言しやすい雰囲気を作る ③アイスブレイクの方法を考える ④授業初回で小レポートを行う＝学生一人ひとりの学修に向かう意欲や現状を把握する ⑤課題評価を早く返却する＝学ぶ意欲の減退を防ぐ ⑥予習復習の意味を明確に伝え、内容の難易度を検討する＝動機づけとモチベーション ⑦実践後の振り返りの時間を取る ⑧課題の期限を徹底する
長期目標		①主体的に学ぶ、学びを深めるしぐまを考える ②学生一人ひとりをよく見て一人ひとりに光があたるように授業をする ③子どもを温かく受け止め、子どものことを（考えるのが）楽しい、面白い、可愛いと心から思える授業をしたい（実践や事例を豊富に）

(4)「乳児保育Ⅰ」の授業評価アンケートの検討

学生による授業評価アンケートを学期末の授業内で10分程度の時間を設けてWEB方式で実施した。授業アンケートは5段階評価で回答する23の設問と自由記述からなる。2022（令和4）年1月、今年度前期末に行った授業評価アンケートの結果が出たことを受けて、授業改善の資料として検討した。

アンケート実施日：2021年7月15日
「乳児保育Ⅰ」第14回目授業時間内
アンケート回収率：92.0%（回答数46名／履修者数50名）

教授法に関する質問において評価平均は4.3ポイント、自由記述には「実際の子どもが言葉を話す様子を動画で見ることができ、分かりやすかった」、「教材トラブルなどもあったが、非常に熱意が感じられる分かりやすく楽しい授業でした」とコメントがあった。オンライン型授業のメリットを生かしつつ、教育への熱意をもって専門性を伝えることができたのだと感じられる結果であった。一方で、「学生の私語を注意する

など、スムーズな授業の運営に努めていた」という質問では3.9ポイントとやや低い数値となっていた。前期はフルオンライン型授業であったため、学生はマイク・カメラをオフにした状態でおり授業内では私語が起り得ない。そこで、スムーズな授業の運営を学生がどのように解釈して回答したかを推察しなければならない。前期授業では、事例や統計を見て、グループ討議する機会を多く取り入れてきた。Googlemeetのブレイクアウトセッションを使い、自動的に振り分けられたグループで話し合うのだが、進行や発表者を教員側で設定しなければ自ら進んで発言することがお互い表情も見えない中で難しいという要望があった。その要望に対応してもなお、「話し合いが進まない」、「議論が深まらず表面的に終わってしまい沈黙の時間が続く」といった様子が見受けられた。教員もセッションに入り、話し合いの状況を聞いては助言したりするが、必要な時に迅速な対応ができていなかったのだと考えられる。

次に学生の意欲・取り組みに関する質問において評価平均は4.1ポイントであったが、「この授業に関して、予習や復習などの事前準備や復習

にどの程度の時間をかけましたか」という質問では2.9ポイントと著しく低い数値となっていた。とくに、予習や復習を「全くしていない」と回答した人は9名、「週30分未満」と回答した人は12名もいた。このことは、前述のTPチャートからの省察でも課題となっていた点である。予習や復習をする目的を明確にして伝えることや動機づけができるようにすること、学生の理解度をはかるなど一人ひとりの状況を把握し、難易度を考えて課題設定することでモチベーションを上げる・維持すること、ルーブリック評価の項目を改善して主体的に取り組む姿勢を評価できるようにするなどの方法を具体的にしていきたい。

さらに気になる点としては、「この授業において、教員とコミュニケーションを行う機会の提供の説明について」という質問に対して、9名の学生が「覚えていない」と回答しており、このうちの5名は予習や復習を「全くしていない」にも該当することである。予習や復習を含め、学びへのモチベーションの向上には、教員とのコミュニケーションの活性化をはかるよう改善の必要性があると考えられた。

オンライン型授業で学生全員がマイク・カメラをオフにしている中、発言をするというのはハードルが高いようで、講義内容が終わったあとは、しばらく個別の質問時間を設けるようにしている。質問等への連絡先を伝え、課題には毎回質問・要望を記入できるようにもしている。しかし、教員とコミュニケーションを行う機会の提供の説明について「覚えていない」、予習や復習を「全くしていない」という学生に対しては、教員側の声が届かなくなる前に早期に対処する必要があると思われる。その具体的な方法については、今後の課題として研修や同僚の教授法などから積極的に学びたい。さらに対面型、オンライン型、ハイフレックス型を織り交ぜて実践したブレント型の「乳児保育Ⅱ」は、ポストコロナ時代の授業方法として可能性もっている。今後は、アクティブ・ラーニングの観点から「乳児保育Ⅱ」の授業実践を省察し、評価したいと思う。そのために、「乳児保育Ⅱ」の授業評価アンケートの結果が出た際には、今回の

結果と合わせて検証したい。

6. おわりに

本稿では、今年度の「乳児保育Ⅰ及びⅡ」の授業実践について、TPチャートから省察し、学生による授業評価アンケートと合わせて、課題と改善方法を検討した。TPチャートでは、自らの教育理念に向かって、方針や方法を見直していくことで改善したい点や長期の目標を定めることができた。さらに学生の声を聴き、授業の充実・改善に反映させることのできる授業評価アンケートと組み合わせることで、改善点を次年度のシラバス作成につなげたいと思う。最後に、学生の学びや成長を検証することができなかつたため、授業内容の改善や充実のためにも、リアクションペーパーの中身を検証することを今後の課題としていきたい。

註

- i) 基幹科目群、人間力向上科目群、就職・資格科目群を1群科目とする共通科目：一部こどもコミュニケーション学科を除いては全ての学科で履修可能な科目群である。専門科目は2群科目としてこどもコミュニケーション学科を除いては他学科生も履修可能な科目群である。学科限定科目は3群科目として他学科生は履修不可としている。

引用文献

- 1) 内閣府「子ども・子育て支援新制度」
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html> (accessed 2022.1.31)
- 2) 厚生労働省「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」[報告書]
<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000189068.html> (accessed 2022.1.31)
- 3) 文部科学省中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」平成20年4月10日
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm (accessed 2022.1.31)
- 4) 栗田佳代子・吉田壘 (2021)「リフレクションを可視化する ティーチャング・ポートフォリオ・チャート作成講座【Web解説動画付】」医学書院
- 5) 前掲4) p. 21
- 6) 栗田佳代子・吉田壘 (2019)「ティーチャング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ資料」2021.1.20版
<https://kayokokurita.info/post-319.html>

2021年度 こどもコミュニケーション公開講座・ フォーラムの報告

Summary Report of Open Lecture and Forum by Childhood Education and Research Center

こどもコミュニケーション研究所長
村上 涼

1. はじめに

2020年から2021年にかけて、新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）感染拡大により、日本社会全体があらゆる面で変化を余儀なくされ、教育・研究分野においても様々な面で大きな変化を迫られたといえよう。2020年4月当初は、多くの大学がオンライン配信を主軸とした形態の授業を開始し、入学式や卒業式、学園祭といった行事においてもオンラインを活用した形態に移行していった。その後、新型コロナウイルスのワクチン接種が進み、2021年11月頃には、ようやく日本国内の感染者数が減少に転じて、授業や学園祭を対面で行う大学もみられるまでになった。しかしながら、本稿を執筆している2022年1月において、新型コロナウイルスが変異したオミクロン株の感染拡大により、再び感染者が増加し、感染拡大の地域にはまん延防止重点措置が適用される状況となっている。

こどもコミュニケーション研究所においても、この2年間は変化を伴う2年間であった。2020年度の公開講座・フォーラムは、参集が難しいことから開催を見送ることとなった。2021年度は、参集をしなくても開催できる方法を模索し、オンラインでの開催を検討した。参加者によって、情報機器の違いやネット環境が多様であることから、一般参加者がスムーズにオンライン参加できるのか懸念もあったが、一般参加者へのオンライン参加方法のマニュアル作成配布、参加者用のデモンストレーションの設定や、一人

ひとりの参加者へのメール対応など、研究所運営にあたっている関係職員・教員が一丸となって、ひとつずつ懸念事項に対応した。開催直前には、講師と運営側で打ち合わせやデモンストレーションを実施し、当日はネットワーク上のアクシデントに対応できるような体制を作って臨んだ。

公開講座やフォーラムの講師の先生方におかれては、オンラインでの開催となり、さぞや戸惑われる部分もあったのではないかと推測されるが、先生方の魅力あふれるお人柄と語り口、何よりも含蓄に富むお話しの内容によって参加者を魅了していただくことができた。オンライン開催を検討した当初は、対面参集開催よりも一体感や双方向性を確保することが難しいのではないかと案じていたが、それは杞憂であったと感じている。

オンラインによる開催は、これまで時間や距離の制約があり、参加不可能であった方々も参加できるというメリットがあり、今後も公開講座やフォーラムの開催方法の選択肢のひとつとして残していきたい。こうしたことから、こどもコミュニケーション研究所がオンライン開催に挑戦したことは、大きな意味があったと考えている。

最後に、公開講座やフォーラム開催にあたっての今後の課題について述べたい。公開講座終了後の実施形態についてのアンケートの結果は、「オンラインでの開催がよい30.8%」「どちらでもよい50%」「対面での開催がよい19.2%」とな